

る。地震発生の歴史を知る上でも、発生の時間系列・場所の研究の上でも、また過去の地震被害の反省材料としても、大変重宝なものであり、このハンディな事典の価値を高めている。ただ、ちょっと残念なのは、1884年以前の日本の被害地震の表に地震の規模を示す数値がなく、不確かかも知れないが『理科年表』程度の()つきの規模でも載せてほしかった。

各章の終りには“one point”という囲み記事があるが、これはそれぞれの章の補足としても、また専門的立場から見ても大変重要な部分であり、本書の1つのチャーム・ポイントである。

この事典はかなり高価であるが、図書館や大学の関係研究室などには、ぜひ備えて頂きたいもので、このような総合的教科書が世に出たことを喜びたい。

〈朝倉書店、580頁、1987年、A5判、1200円〉

[みくも たけし 京都大学防災研究所教授]

関係者必携の被害地震データベース

宇佐美龍夫著『新編日本被害地震総覧』

石橋克彦

待望の新編である。1975年に出た本書の旧版『資料日本被害地震総覧』は、それまでの簡単な地震の表と膨大な地震史料集や調査報告・論文類とのギャップを初めて埋めた画期的な本で、多方面の人々が机上に備えてたえず参照した。しかし、その後十余年間に歴史地震研究が著しく進展したことや、多くの被害地震が発生したことなどから、改訂版の発行が待たれていた。

本書の構成は旧版と同じで、「1. 序——地震と災害」「2. 内容の概説」「3. 被害地震総論」「4. 被害地震各論」の4章からなる。1～3章は統計表などを除いては旧版のままだが、「新編はしがき」と2章は、本書を十分活用するために、ぜひきちんと読むべきである。

本書の中心をなす4章には、416年の大和付近から1984年12月の東京湾までの、わが国に何らかの被害を与えた地震860個について、年月日、時刻、震央地名、震源の緯度・経度・深さ、マグニチュード、記事などがまとめられている(地震番号は653番までだが、被害が小さかったり地震かどうか疑わしいものが、無番号で多数収録されている)。記事は震度、被害、地変、余震などに重点がおかれ、地震学的説明は必ずしも十分ではないが、これは本書の性格からいって妥当なことだろう。ただし、

地震学を専門としない読者は、余震分布・断層解・断層モデルなどの地震学的な事項が、多くの地震について最近急速に改訂されつつあることを承知していたほうがよい。このことは、記事や図表がほとんど旧版のままの明治以降の地震について、とくに注意したい。そのような意味で、旧版のままの付表「地震の主なパラメーター」は、むしろ削除してもよかったのではなかろうか。

記述は一般に必要な簡潔さだが、地震によっては震度分布図や被害統計表などを豊富に使ってかなり詳しく説明されており、工学研究者や広範囲の防災専門家にとくに役立つだろう。もちろん、地震研究者やそれ以外の人々にとっても、日本の有史以来の地震活動を概観するのにたいへん便利である。

著者は旧版の「はしがき」で、新史料の収集に努力して内容を改善してゆきたいと述べたが、単にその約束を果たすという以上の情熱で、膨大な地震史料の収集・刊行をつづけてきた。その成果は本書に遺憾なく現れており、とくに1872年以前について、地震数が125個も増え、内容も大幅に強化・改善された。震央やマグニチュードは、ほとんど改訂されたうえ新たに誤差や範囲が付記された。ただし、旧版以降の目覚ましい斯界の研究成果が網羅的に取り入れられているわけではなく、あくまでも著者の見解を前面に打ち出した形になっている。引用されている解釈も少なくはないが、たとえば、1614年の越後高田付近の地震や、1854年の安政東海地震などに関する最近の説は採用されていない。

また明治以降の震災の最近の調査結果(1944年東南海地震など)が十分紹介されていないのはやや残念である。

なお初刷には、表385-1、544-1、545-1などの編集ミスや多少の誤植が残っている。

過去の地震の見直し作業の進展は、最近とくに目覚ましい。将来は、それらの結果を1人の著者が本書のような形にまとめることはほとんど不可能になるだろう。その意味でも、本書は記念碑的労作といえよう。

とにかく、旧版の愛用者はもとより、地震学・地学・工学・災害科学などの研究者・実務家や行政の防災担当者などにとって必携の本である。また、地震国日本の自然と人間の係わり合いの歴史を客観的に提示した基本図書として、全国の公共図書館にもぜひ備えてもらいたい。

〈東京大学出版会、434頁、1987年、B5判、20000円〉

[いしばし かつひこ 建設省建築研究所国際地震工学部応用地震学室長]